

言葉と発達

いまだき子育てアドバイス

連載・116

好きになること in 地域



言語聴覚士 中川信子

講演旅行は研修旅行兼用

お招きを受けて四国・徳島に行きました。私が親分を務める「子どもの発達支援を考えるSTの会」の会員でもあるST（言語聴覚士）のAさんが計画を立て、お金を確保してお呼びくださったのでした。

たまたま、4月に入ってから、時間にも、気持ちにも余裕があったので、早めの飛行機で前日に着くことにして、Aさんが所属する徳島市内のT発達支援センターを見学させていただくことにしました。旅費をかけずに、研修見学ができるのも、講師依頼があったればこそ。幸運に感謝しました。

そのT発達支援センターは徳島市名東町T病院の敷地内にあります。事前に「支援センターと言っても、一年前に急に作った小屋みたいなもので……」

と聞かされていたわりには、どうしてどうして。

広すぎないプレイルームはウッディフロアです。窓一つとっても、その高さや大きさに、子どもたちの気が散らないようにとの配慮が感じられ、とても居心地のよい空間でした。公立の建物の中には、お金はかかっているかもしれないけど、「何、これ？ 使いにくいよー、居心地悪いよー」って言いにくくなるようなところも決して少なくないのです。

同じ敷地内に、病院と、老人保健施設「M苑」と、グループホーム、そして、発達支援センターが配置されています。

不思議な発端

高齢者主体の病院に、発達支援センターが併設されているのはなかなか刺

激的な風景。

以前、鹿児島県鹿屋市にお招きいただいたとき、O記念病院のリハビリテーション部門に、子ども対象のSTやOTが多く配置されていて、地域のたくさん子どもたちが指導を受けに通ってきているのを目の当たりにして、とても感激したことを思い出しました。

その鹿屋の病院も、今回の徳島の病院も、「地域医療」を熱心に追求しているという点は共通しています。いろいろなイベントをやったり、地域向けの読みやすく楽しい印刷物を発行したり。今回の徳島市のT病院は、病院内のリハビリテーション部門ではなく、れっきとした自立支援法適用の児童デイサービスとしての発達支援センターであるという点では、とても、先駆的なものでは！ と思いました。もっとも、ひとごとながら、経営面はとても心配です。

大きな家族

生来の「知りたがり病」を発揮して根ほり葉ほり聞きだしたところでは、病院内に発達支援センターが作られたのには、深いわけといくつかの幸運な偶然が重なっているらしく、ほんと、世の中は、不思議な出会いが、予期せぬところに用意されているんだなーとあらためて感動しました。

支援センター長でもあるお医者さんは笑顔を絶やさぬチャームिंगな先生です。敷地内を歩くと、苗字ではなく「あや先生」と名前で呼ばれます。ほら、保育園や幼稚園では、先生のこと「よしこ先生」とか「ゆうこ先生」とか言うじゃないですか。それと同じノリです。そのわけは、同じ苗字の男先生もいらっしやるから。そう、ご夫婦なんです。

病院とセンターとを案内していただいたのですが、敷地内のどこを歩いても、みんなが仲のよい知り合い同士という感じでした。個人病院であることが、良いほうに働いている実例だなんて思いました。

支援センターに通ってくる子どもたちは、目と鼻の先にある病院の事務室に道具を借りに行ったり、返しに行ったりの「お使い」をして、外部の大人たちと触れ合う工夫がされています。さりげないSST（ソーシャルスキルトレーニング）というわけです。一方、大人の側でも、随時一人ずつの子どもの特性に触れられるのですから、視点を変えれば啓発活動とも言えるでしょう。

センターの建物では広さが足りないような体を動かすプログラムは、病院内の使わないスペースを使わせてもらえたり、病院内のリハビリテーション

室を感覚統合訓練ができる専用室に改造したりされています。また建物も人もお金の出所も、いろいろな柔軟な工夫がされています。

老健施設やデイサービスの高齢者の方たちと子どもたちとは、お餅つきなどの行事を通してふれあいができるような計画されているそうです。「自閉症とは？」とか、「多動とは？」とか、特段の知識のない高齢の方たちですが、子どもたちが出入りすることを歓迎してくださっているとか。

そんなふうに、さりげなく、いろんな年齢の、いろんな特性を持つ人たちが自然にすれちがったり、触れ合ったりする場面が敷地内で繰り広げられているのです。

ここ全体が大きな家族。そんな気がして、案内されているだけで、何だかふわーんといったいい気持ちになってきました。

大きな家族がみんなでハッピーになろう。それが地域

あばれん坊の子どもと、どっしり構えたおばちゃん。内気な坊やと、物静かなおじいちゃん。いろんな絶妙の組み合わせが、ちゃんとでき上がるのが「地域」とか「社会」とかいうものの、本来の姿だったはず。

あっちでははじき出されてしまう子だけ、こっちでは、しっかり受け入れてもらえる。こっちでは、なかなか本領を発揮できない子も、別の場所では「スゴいね」とほめられっぱなし。勉強ではさえないけど、スポーツならまかせといて！

大きな家族⇨地域の縮図が、模擬的に病院の敷地内に作りだされている感じがしました。

「地域」で暮らすということは、家族と同じように、互いの違いを知りつつ

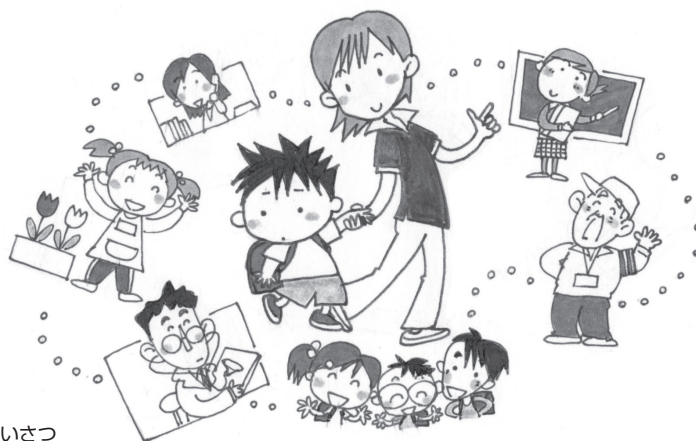
も、共に生活すること。それぞれが知り合い、認め合い、一緒にハッピーになろうとすることだと思います。

欠点ばかりをつつかれて「だめだめだ、もつとがんばれ」と言われたら、自信を失いやる気も出ないけど、「君の、こういうところで助かるよ」と言ってくれる人があれば、自分を好きになれて、ハッピーになります。

このことなら任せて、得意だから。でも、これは、ちよつと力が及ばないから助けて。そんなふうに、それぞれの人や機関が持つ得意な点で、ほかの人や機関の不得意な点を補完する。そうやって、全体像を描き、補い合って努力するのが地域の良さだと思います。

ねぎらいと感謝のことばから始める

でも、努力したり、肩代わりしたりする気になれるのは、そこにいる人た



互いがあいさつ

ちを知っていて、大切に思えるから。顔見知りの関係だからこそ困っていたら助けてあげようと思える。逆に自分が困っているときには「助けて！」って声をあげられる。必ず誰かが助けてくれるだろうと思えるから。

相互信頼ときずな。

規模の大きな家族。

いったん失われたように見えるそういうものを、私たちは、発達障害の子どもたちを水先案内人にして、再度作り出そうとしているのではないでしょう。

なぜなら、発達障害を持つ「彼ら」は、一箇所だけの支援ではなく、いろいろな場所での、多種多様な連続した支援を必要とするから。まさに地域ぐるみでの障害の特性理解や機関同士の連携なしには、人生を順調に越えてゆくことができないから。

発達障害の子がいるところでは連携

の必要性はつきり浮き出てくるのだと思います。

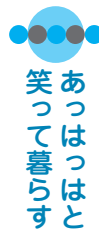
そして、機関同士、人同士の連携は、「互いを知り合うこと」「顔見知り、せめて、電話による声を知っている者同士になる」とことと、「会ったら、まず、ねぎらいと感謝のことばから話を始める」ということに尽きると思います。

このことは、北海道大学の田中康雄先生もその本の中に書いていらっしゃる。『軽度発達障害のある子のライフサイクルに合わせた理解と対応』学研 2006)

「いつもありがとうございます」「子どもたちがお世話になってます」「おかげさまで、助かっています」そして、「お互いにお互い大変ですね」という挨拶から始めることが大事。

保健師さんたちが関与する連携会議などが開かれることも増えてきたと思

いますが、「お忙しい中お集まりいただきありがとうございます」ということばに思いを込めて発言することが、連携を進める大事な要素にもなってくるのだと思います。連携が進めば、自分たちの肩の荷が下りてラクにもなれます。



徳島でのもう一つの思い出は笑いです。T発達支援センターのスタッフさんがお食事を開いてくださったのですが、そのメンバーのOT（作業療法士）さんがあまりに愉快なパーソナリティだったので、参加者全員、笑い通しでした。「息が詰まるほど笑う」とは言い得て妙なりで、涙が出るほど笑ったのは、何年ぶりかしらと思いました。翌朝ホテルで朝食を食べているときにも、「くつくつくく…（笑）」と思

出し笑いが出て、お味噌汁を吹き出しそうになりました。

人間に、笑って、大切ですね……。

OTは、その養成課程で、「楽しくなければ！」と徹底的に教えられるそうです。本人が楽しいと思えるしかけでなくては、対象者も乗ってきてくれるわけがないですよ。

真面目 一方になりがちなSTや保健師さんたちも、見習いたいものです。

笑いにあふれた地域。顔見知りがあつちにもこつちにもいてねぎらいと感謝のことばが行きかう地域。

地域がそんなふうになったら、どんなに安心して住めるだろうと思います。理想論に過ぎるかもしれないけれど、小さな単位でも、そういう場を作り出す努力をしていきたいと思っています。

